

平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業報告書

**宮城県
平成29年3月**

目次

はじめに	1
事業趣旨	2
第1章 平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業について	
1 取組の経緯	4
2 事業概要（事業目的及び実施内容）	4
3 事業スケジュール	5
第2章 事業成果	
1 1歳6か月健診における健診ツールの導入支援	
（1） M-CHAT について	7
（2） 事業日程	7
（3） M-CHAT 導入結果の分析	8
2 現任者スキルアップ研修の支援	
（1） 座学及び自立課題づくり	9
（2） 保護者及び現任者の参加しての感想	10
（3） 保護者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析	16
（4） 現任者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析	16
（5） 保育所長・幼稚園長・児童館長アンケート調査結果	17
（6） 代替保育士・幼稚園教諭アンケート調査結果	19
のびっこクラブに参加して	21
3 ペアレント・メンターの育成支援	
（1） ペアレント・メンター育成の取組経過及び概要	23
（2） ペアレント・メンター研修	23
（3） ペアレント・メンター検討会	24
第3章 考察	25
おわりに	26
参考資料	
平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業実施要綱	28
平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業企画・推進委員会構成員名簿	31
平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業アセスメント検討会開催要領	32
平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業アセスメント検討会構成員名簿	33
平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業ペアレント・メンター検討会開催要領	34
平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業ペアレント・メンター検討会構成員名簿	35
平成28年度宮城県発達支援者養成研修およびペアレント・メンター養成研修実施要綱	36
河北新報朝刊及び広報まつしま2017掲載記事	37

以下のホームページに本事業に関する情報を掲載しているので、御参照ください。

<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/syoufuku/h28hattatsu-model-miyagi.html>

本報告書、のびっこ通信、のびっこクラブの様子を掲載。

はじめに

発達障害者支援法が施行されて１０年が経過しました。この１０年の歩みの中で、社会における発達障害の概念理解は進んできました。

発達障害と一言と言っても症状が様々であり、その特性を理解し支援を行うことが必要です。そしてなるべく早い時期から周りの人たちが障害の特徴やその子どもの特性を理解して、一人一人に合った支援を行うことで、社会生活に適応できるスキルを身に付けられようになります。こうしたことを知識として知ってはいても、実際どのように接していけばいいのかということになると、学べる場が少ないというのが現状ではないかと思われます。

県ではこうした状況を踏まえて松島町をモデル地域として、３つの仕組みづくりに取り組みました。１つ目は早期発見のための健診ツールの導入、２つ目は実際に幼稚園や保育所で発達の気になる子ども達の支援を行っている現任者への研修、３つ目は発達障害の子育て経験のある保護者が、現在子育て中の保護者の相談に乗るペアレント・メンターの育成です。事業を通して、実際に発達の気になるお子さんと接し発達支援に取り組んでこられた先生方の経験は、今後の宮城県の発達障害児支援のあり方に大きな示唆を与えてくれるものと考えています。

発達障害に対する支援として「社会資源の限られる地域でも有効な仕組みづくり」を行うことを目的に実施しましたが、全国の地方都市において支援体制づくりを進めていく上での何らかの参考になれば幸甚です。

なお、事業実施に際して厚生労働省、松島町、松島町教育委員会、松島町社会福祉協議会をはじめとした様々な関係機関の熱意と御支援を賜りました。本事業に関わる全ての関係者に改めて感謝申し上げます。

平成２９年３月

宮城県保健福祉部参事兼障害福祉課長 佐藤謙一

事業趣旨

1 事業目的及び事業内容

本モデル事業の目的は「発達の気になる子ども達に対して、子育て支援センター（児童館）を拠点とした早期支援体制を図ること」とし、松島町をモデル地域とし、社会資源の限られる地域でも有効な仕組みづくりの検討を行った。

モデル事業では、①1歳6か月健康診査（以下「健診」という。）にアセスメントツールを導入し発達の気になる子を早期に町の個別の相談の場「子育てひろば」につなげる「健診ツールの導入支援」、②保育士・幼稚園教諭等の現任者（以下「現任者」という。）で発達の気になる子どもの支援課題を子育て支援センター（児童館）で行う療育を通じて検討する「現任者スキルアップ研修の支援」（通称「のびっこクラブ」という。）、③発達の気になる子どもを育てた経験のある「先輩保護者」が子育てに悩む母親等のサポーターとなるために必要なスキルを研修で習得する「ペアレント・メンターの育成支援」を3本柱として行った。早期療育により二次障害の予防と発達障害の相談体制構築を行い、資源が限られた地域において、発達支援の専門職頼みでなく、地域の支援者が支援に当たる仕組みづくりに取り組んだ。

2 事業成果

（1）1歳6か月健診における健診ツールの導入支援

9月から10月に3回行われたアセスメント検討会の後、12月と2月の2回の松島町の健診でM-CHATを実施した。27人のうち、8人が陽性となり、要フォローとなったのは3人であった。保健師からは、健診の流れに影響することなく実施できた、基準が決まっているので活用しやすいなどの声があり、健診実施に当たり有用であった。結果については2月から3月に2回行われたアセスメント検討会で分析を行った。

（2）現任者スキルアップ研修の支援

6月から9月にかけて座学を5回実施し、9月から2月に保育所グループ5回、幼稚園グループ5回ののびっこクラブを実施した。

毎回の保護者のアンケート結果において、回を追うごとに成長する子どもの姿が見られている。また、保護者自身についても子どもの姿を見て元気が出たり、相談を通して安心する姿が見られた。

毎回の現任者のアンケート結果からは、毎回子どもの成長を感じたり、学びがあったことが見られた。

保護者5人を対象に事業前後で行った発達理解、行動理解、興味理解等のアンケート結果及び気分や感情の状態を測定するPOMS短縮版においては、いずれの項目でも有意な差は見られなかった。

現任者8人を対象に事業前後で行ったアンケート結果では、発達知識、療育工夫、環境調整の3項目において自信が増す傾向が認められた。繰り返し実践と検討を重ねて学んだ分野では成長が見られることが分かった。

事業終了後に保育所長等7名の管理者向けに行ったアンケートでは、発達知識、アセスメントスキル、療育工夫、環境調整、家族理解のいずれの項目においても現任者の深まりを感じ、さらに「のびっこクラブ」での経験が保育現場に活かされたり、職員の意識向上につながっていることが分かった。

事業終了後に代替保育士等8名に行ったアンケート結果では、依頼の仕方、事前説明、賃金、依頼頻度ともいずれの項目においても適切との回答で、仕事の不安、職員間のコミュニケーションの取りにくさ、子どもの対応の難しさなども大きな問題なく取り組んでいる。代替職員として勤務したことは、現任者の学びを保証するために役立てたというやり甲斐に繋がり、現任者の学びを次の世代に伝えたり、実践を園の中で活用することに継続して取り組むことへの期待が挙げられている。

座学及び「のびっこクラブ」に参加した8人の現任者には、「発達支援者基礎講座修了証書」が授与された。

(3) ペアレント・メンターの育成支援

11月から2月にかけてペアレント・メンター啓発研修及び養成研修を実施した。特定非営利活動法人日本ペアレント・メンター研究会事務局長小倉正義鳴門教育大学准教授を講師に迎え、メンターの役割の理解や相談を受ける上での必要な技術をロールプレイも交えて学んだ。養成研修を全課程受講した17人の保護者には「ペアレント・メンター研修基礎講座修了証書」が授与された。

また、ペアレント・メンター検討会を2回実施し、県内での事業化に向けての話し合いを行った。既存の親の会の活用や負荷の少ない事業から取り組んでいくことについて意見が出ており、平成30年からの事業化目標に向けて平成29年度も継続して話し合いを続ける予定である。

3 考察

本事業を通して以下の7点について効果が認められた。

- ①M-CHATは健診場面において、健診担当者の支援の参考となった。
- ②発達障害児者支援は難しい、専門家でなければならないという意識があったが、子どもに分かりやすい声掛けや集中しやすい環境調整等の実践を通じて、保育士、幼稚園教諭、親などが療育支援に自ら取り組むことへの自信が付いた。
- ③早期発見（健診）から松島町での相談事業（巡回支援専門員整備事業）、療育（のびっこクラブ）、保育所・幼稚園での相談（巡回支援専門員整備事業）の流れができ、利用しやすい子育て支援センター（児童館）を中心とした支援体制ができつつある。
- ④支援者（巡回支援専門員による事例検討、のびっこクラブ、M-CHAT勉強会）や保護者（のびっこクラブ、ペアレント・メンター研修会）に学ぶ機会ができたことで、スキルアップが図られた。
- ⑤組織を超えて現任者が集まり、支援について検討を重ね、実践することで、その知見を還元し、町全体の支援スキルの平準化を図る素地ができつつある。
- ⑥安心して現任者が学ぶためには、退職した保育士・幼稚園教諭がバックアップする仕組みが有効であった。
- ⑦ペアレント・メンターの育成を通して、宮城県の支援の幅を広げていく土台づくりに取り組むことができた。

発達支援を専門家任せにせずそれぞれの立場で対象児者の特性を理解しながら地域の支援者が支援を提供すること、そのために自らの専門性を不断の努力で高め、支援の受け皿を広げて、各機関の支援が重なり合うよう、地域支援体制を作っていくことが望まれる。

第1章 平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業について

1 取組の経緯

宮城県では平成27年から学識経験者、障害福祉サービス事業所、親の会、発達障害者支援センター、市町村、医療、保健、福祉、教育、労働、消費生活、警察等の関係部局及び機関の職員等の31機関で構成される「宮城県発達者支援体制整備検討会」（以下「検討会」という。）を設置し、乳幼児期、学童・青年期、就労・成人期の3つのワーキンググループに分かれ県の発達障害の支援と課題について議論を重ねてきた。

この検討の中で発達障害に共通する課題としては、発達の相談ニーズの増加（特に発達障害疑いケース）、相談や療育に関わる人材育成、身近な支援の支援拠点の整備、各支援機関へのバックアップ体制の未整備、切れ目のない支援体制、診断ができる医療機関の不足が挙げられており、ライフステージごとの支援内容と課題については表1のとおりである。これらの課題のうち、特に乳幼児期の課題である「親が子どもの特徴に気づき、親の困りごとに寄り添う支援体制が身近な地域で未整備であること」に焦点を当て検討を行い、平成28年度発達障害児者支援開発事業（以下「モデル事業」という。）に応募し、採択となった。

表1 発達障害の年齢段階ごとの支援内容と課題

年齢段階	支援内容	課題
乳幼児期 (0～6歳)	・乳幼児健康相談 ・乳幼児精神発達精密健康診査等 ・療育や育児支援	・親が子どもの特徴に気づき、親の困りごとに寄り添う支援体制が身近な地域で未整備であること。
学童・青年期 (7～18歳)	・通級教室、特別教育支援等 ・放課後の過ごし方 ・不登校、ひきこもり、心の悩み相談	・福祉と教育の連携（個別支援計画の目標共有）。 ・障害児支援サービス（放課後等デイサービス等）の質の向上。 ・発達障害者の二次障害への予防（非行、不登校等）
就労・成人期 (18歳～)	・職場意識の啓発 ・無業者心理カウンセリング ・職業相談、職場体験等 ・職場従業員への理解促進	・就労前支援と離職予防支援。 ・消費者被害の予防。 ・自己理解と周囲の本人理解の促進と企業理解の啓発。 ・発達障害者の二次障害への対応（自傷、他害、ひきこもり等）

2 事業概要(事業目的及び実施内容)

本モデル事業の目的は「発達の気になる子ども達に対して、子育て支援センター（児童館）を拠点とした早期支援体制を図ること」とし、松島町をモデル地域とした。松島町は人口約1万5千人の地方都市で、社会資源の限られる地域でも有効な仕組みづくりの検討を行った。

モデル事業の3本柱は、①1歳6か月健康診査（以下「健診」という。）にアセスメントツールを導入し発達の気になる子を早期に町の個別の相談の場「子育てひろば」につなげる「健診ツールの導入支援」、②保育士・幼稚園教諭等の現任者（以下「現任者」という。）で発達の気になる子どもの支援課題を子育て支援センター（児童館）で行う療育を通じて検討する「現任者スキルアップ研修の支援」（通称「のびっこクラブ」という。）、③発達の気になる子どもを育てた経験のある「先輩保護者」が子育てに悩む母親等のサポーターとなるために必要なスキルを研修で習得する「ペアレント・メンターの育成支援」から成っている。

モデル事業では幼児健診で発達の気になる子どもを「子育てひろば」での相談を通じて、療育教室「のびっこクラブ」への参加を促す。「のびっこクラブ」では現任者が勤務時間内に子育て支援センター（児童館）に集まり、定期的に子どもへの療育支援と保護者への相談支援を行う。その間、

各保育所・幼稚園には定年等により退職した保育士・幼稚園教諭等が代替保育士等として勤務する。子育て支援センターでは保護者等とも連動しながら現任者が発達支援についてスキルアップを行うとともに、保護者等を対象としたメンター研修も行う。ちなみに「のびっこクラブ」は、子どもも保護者も支援者もみんなが伸びるという意味で名付けられた。早期療育により二次障害の予防と発達障害の相談体制構築を行い、資源が限られた地域において、発達支援の専門職頼みでなく、地域の支援者が支援に当たる仕組みづくりに取り組んだ。

＜厚生労働省モデル事業＞ 宮城県発達障害児者支援開発事業について

1 事業の概要

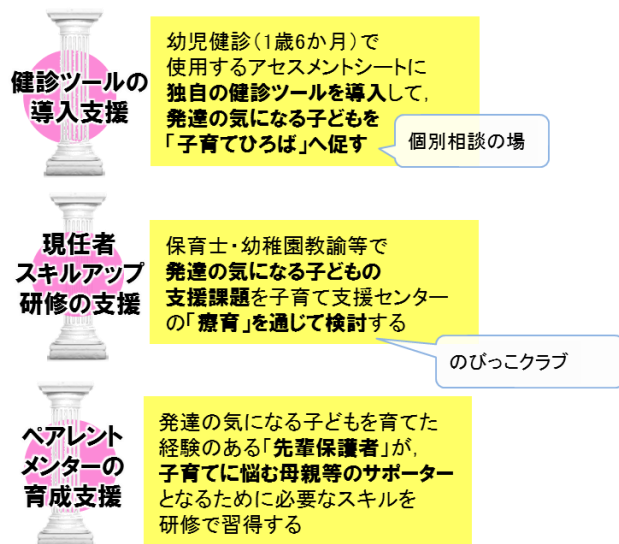
保育士等として従事している方々に、効果的な発達障害支援を行うための専門知識やスキルを保護者と協働しながら習得いただく仕組みづくりを行う



2 事業実施スキーム



3 事業の“3本柱”（特徴等）



3 事業スケジュール

事業スケジュールは表2のとおりである。企画・推進委員会は事業開始後の8月と事業終了時の3月に開催した。

健診ツールの導入については、のびっこクラブや健診でのアセスメントツールについて検討するアセスメント検討会を5回開催している。また健診を担当する保健師等を対象とした健診ツールであるM-CHAT勉強会を開催し、12月の健診からM-CHATを導入した。

ペアレント・メンターの養成については、特定非営利活動法人日本ペアレント・メンター研究会事務局長で鳴門教育大学准教授の小倉正義先生を講師に迎え、11月に啓発研修を、1月と2月に養成研修を実施した。あわせて、ペアレント・メンター検討会を1月と2月に開催し、ペアレント・メンター制度の体制構築に向けた検討を行った。

表2 事業スケジュール

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
現住者対象のト	① 6/23 18人	② 7/20 18人	③ 8/18 AM8人・AM7人・PM3人・PM5人・PM6人	④ 9/20 AM8人・AM7人・PM3人・PM5人・PM6人	⑤ 10/14 AM6人・PM7人	⑥ 11/11 AM6人・PM6人	⑦ 12/9 AM10人・PM8人	⑧ 1/27 AM4人・PM10人	⑨ 2/17 モデル事業開始 各会館 130人	
健 診				① 9/20 AM6人・PM6人	② 10/20 AM6人・PM3人	③ 11/17 AM7人・PM3人	④ 12/15 AM6人・PM7人	⑤ 1/19 AM6人・PM8人	⑥ 2/16 AM6人・PM6人	
メンタル養成				① 9/12 6人	② 10/7 8人	③ 11/7 8人	④ 12/6 15時5分 16人	⑤ 1/27 11時5分 11人	⑥ 2/28 9人	⑦ 3/7 7人
委員会										
事務局										

アセスメント検討会(分析)

養成研修

M-CHAT勉強会

アセスメント検討会(作成)

啓発研修

第2章 事業成果

1 1歳6か月健診における健診ツール導入支援

(1) M-CHAT について

M-CHAT の使用に当たっては、国立精神・神経医療研究センターに相談し許可をいただいた上で、松島町で行われた1歳6か月健診で使用した。

M-CHAT は生後16か月から30か月の自閉スペクトラム症のスクリーニングとして開発され、23項目（うち重要10項目）から成り、保護者による回答で行われるものである。12月と2月の2回の健診で実施した。

日本版 M-CHAT について

日本語版 M-CHAT (The Japanese version of the M-CHAT)

お子さんの日常の様子について、もつとも質問にあてはまるものを○で囲んでください。すべての質問にご回答くださるようお願いいたします。もし、質問の行動をまったくしないと思われる場合は（たとえば、1、2度しか見た覚えがないなど）、お子さんはそのような行動をしない（「いいえ」を選ぶように）とご回答ください。項目7、9、17、23 については絵をご確認ください。

1. お子さんをブランコのように揺らしたり、ひざの上で揺ると喜びますか？	はい・いいえ
2. 他の子どもに興味がありますか？	はい・いいえ
3. 階段など、何かの上に這い上がるのが好きですか？	はい・いいえ
4. イナイナイバーをすると喜びますか？	はい・いいえ
5. 電話の受話器を耳にあててしゃべるまねをしたり、人形やその他のモノを使ってごっこ遊びをしますか？	はい・いいえ
6. 何か新しいモノがある時、指をさして要求しますか？	はい・いいえ
7. 何かに興味を持った時、指をさして伝えようとしませんか？	はい・いいえ
8. クルマや積木などのオモチャを、口に入れたり、さわったり、落としたりする遊びではなく、オモチャに合った遊び方をしますか？	はい・いいえ
9. あなたに見てほしいモノがある時、それを見せに持ってきますか？	はい・いいえ
10. 1、2秒より長く、あなたの目を見つめますか？	はい・いいえ
11. ある種の音に、とくに過敏に反応して不機嫌になりますか？（耳をふさぐなど）	はい・いいえ
12. あなたがお子さんの顔をみたり、笑いかけると、笑顔返してきますか？	はい・いいえ
13. あなたのすることをまねしますか？（たとえば、口をとがらせてみせると、顔まねをしようとしますか？）	はい・いいえ
14. あなたが名前を呼ぶと、反応しますか？	はい・いいえ
15. あなたが部屋の中の離れたところにあるオモチャを指でさすと、お子さんはその方向を見ますか？	はい・いいえ
16. お子さんは歩きますか？	はい・いいえ
17. あなたが見ているモノを、お子さんも一緒に見ますか？	はい・いいえ
18. 顔の近くで指をひらひら動かすなどの変わった癖がありますか？	はい・いいえ
19. あなたの注意を、自分の方にひこうとしますか？	はい・いいえ
20. お子さんの耳が聞こえないのではないかと心配されたことがありますか？	はい・いいえ
21. 言われたことを覚えていていますか？	はい・いいえ
22. 何もなしで指をじーっと見つめたり、目的なくひたすらうろろろすることがありますか？	はい・いいえ
23. いつもと違うことがある時、あなたの顔を見て反応を確かめますか？	はい・いいえ

M-CHAT copy right (c) 1999 by Diana Robins, Deborah Fein, & Marianne Barton. Authorized translation by Yoko Kamio, National Institute of Mental Health, NCMH, Japan.

M-CHAT の著作権は Diana Robins, Deborah Fein, Marianne Barton にあります。この日本語版は、国立精神・神経センター精神保健研究所児童・思春期精神保健部部長の神尾陽子氏が著作権所有者から正式に使用許可を得たものです。

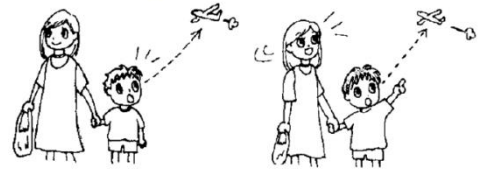
国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・思春期精神保健部に承諾を得て転載

(2) 事業日程

健診ツールの導入にあたっては、学識経験者や松島町担当者、県子育て支援担当部局等が集まって「アセスメント検討会」を開催し、アセスメント項目の検討や分析を行った。また、松島町で健診を担当する保健師や栄養士、保育士等を対象とした M-CHAT 勉強会を実施している。健診において M-CHAT を行ったのは、12月と2月の2回である。

アセスメント検討会、M-CHAT 勉強会、健診については表3のとおり実施した。

7. 何かに興味を持った時、指をさして伝えようとしませんか？



9. あなたに見てほしいモノがある時、それを見せに持ってきますか？



17. あなたが見ているモノを、お子さんも一緒に見ますか？



23. いつもと違うことがある時、あなたの顔を見て反応を確かめますか？



表3 アセスメント検討会、M-CHAT 勉強会及び健診について

	日時	内容	参加者
第1回	平成28年9月12日(月) 午後1時～午後3時	1. モデル事業について 2. 健診におけるアセスメントシート導入について 3. M-CHAT, 統制障害シートの検討	6人
第2回	平成28年9月26日(月) 午後3時30分～午後5時	1. 健診シート案の検討 2. のびっこクラブにおける参加者アセスメントシートの検討 3. のびっこクラブにおける保護者アンケートシートの検討	9人
第3回	平成28年10月7日(金) 午前10時～正午	1. のびっこクラブにおけるアセスメントシート案の検討 2. その他	8人
	平成28年11月17日(木) 午後3時30分～午後5時	M-CHAT 勉強会 国立精神神経医療研究センターの資料活用	8人
	平成28年12月6日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	16人
	平成29年2月7日(火) 午後0時30分～午後3時	松島町1歳6か月健診においてM-CHAT実施	11人
第4回	平成29年2月28日(火) 午後1時～午後3時	1. 健診におけるアセスメント結果の分析 2. のびっこクラブにおけるアセスメント結果の分析	9人
第5回	平成29年3月7日(火) 午後1時～午後3時	1. アセスメント結果のまとめ 2. その他	7人

(3) M-CHAT導入結果の分析

松島町の健診において、2回にわたり計27人にM-CHATを実施した。その結果、8人が陽性(全体項目3点以上3人、重要項目1点以上8人)となっている。このうち、要フォローとなったのは3人であった。

全体項目及び重要項目の両方で陽性となる場合は、要フォローとなる割合が高かった(2人/3人)。一方で重要項目1点のみで陽性になったケースが5人いたが、全てこれまでの健診方法では要フォローとはならなかった。得点が低い場合は観察や問診による情報も合わせて判断することが必要である。

本シートを活用した松島町の保健師からは、健診の流れに影響することなく実施できた、問診の前にあらかじめ合計点等の記載があると良い、基準が決まっているので活用がしやすい、M-CHATの結果のみならず保護者の困り感等の結果から総合的に判断する必要があるなどの感想が聞かれた。保健師にとっては、要フォローとする判断の参考になることが効用として見られ、健診を実施する上で有用と思われた。

今後の課題としては、要フォローとならなかったが、M-CHATでは陽性となった子どもへの対応である。この点については、巡回支援専門員による相談でフォローとなった場合に健診時の結果等を照会して確認するなど、事後利用の方法等がアセスメント検討会において議論された。

M-CHAT 勉強会



1歳6か月健診



2 現任者スキルアップ研修の支援

(1) 座学及び自立課題づくり

現任者スキルアップ研修の座学については、「あなたがつくる支援プラン 困った行動が教えてくれる自閉スペクトラム症の支援、藤原加奈江、診断と治療社、2009」を参考に自閉スペクトラム症の特徴や支援のヒント、ステップに基づいた支援方法の書き出しを学び、実際の支援シートを作って取り組んだ（表4参照）。

表4 座学の内容（5回実施：平成28年6月～9月 77人参加）

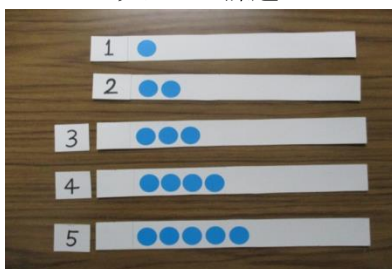
理解や行動の特徴	支援のヒント	ステップ	
感覚と知覚	無理をさせず尊重、環境調整（カーンダウンエリア、ヘッドホーン、サングラス等）	ステップ1	困ったと感じた行動をビデオで見るように具体的に書き出してみよう。
認知	1対1対応の視覚支援（見て分かる、マッチングで分かる）	ステップ2	そのことを変えるには子どもや周りにとってどう必要（緊急性・将来性）かを考えてみよう。
言語・コミュニケーション	快を感じられる対人交流（分かる、伝わって便利、楽しい等）	ステップ3	困ったと感じる行動を引き起こしている原因は何かを障害特徴から考えてみよう。
記憶	要点を紙に書いて伝える、絵に描く、スケジュールを随時消し、展望記憶の整理	ステップ4	子どもにわかるように教えるには、障害特徴に合わせた工夫、さらに子ども一人ひとりの個性に合わせた工夫が大切。一人ひとりのスキルや特徴を知ろう。
注意	切り替え（見えなくなる、箱に入れる）、選択（パーテーションで区切る、見て欲しいものだけ出す）	ステップ5	対応することに決めたら、対象の子どものスキルアップ、やる気コントロール、環境整備の3つの視点から支援を考えてみよう。
実行機能	行動の計画、点検、修正を日頃から意識づけ、計画を立てる習慣、感情のコントロール	ステップ6	困った行動だけにとらわれず、身辺自立、コミュニケーションと社会性、学習課題とお手伝い、余暇など全体を将来まで見通す支援を基本におこう。
		ステップ7	一度でうまくいかないのは当たり前。試行錯誤で乗り切ろう。一人で頑張りすぎず、支え合うチームを作ろう。

座学と並行して、自立課題づくりにも取り組み、プットイン課題（指や手のひらを使って、物を押し込む課題）、マッチング課題（絵と絵、絵と文字など同じもの同士を合わせる課題）、数概念課題など様々な観点から支援課題を制作した。

プットイン課題



マッチング課題



数概念課題



「のびっこクラブ」は主に3歳未満の「保育所グループ」と、主に3歳以上の「幼稚園グループ」の2グループからなっている。午前10時30分から開始し、スケジュールを提示しながら、朝のお集まり、一斉活動、自立課題、帰りのお集まり、さようならで終わるおおむね30分～50分程度の療育である。その後、保護者は集団で子育てについて藤原加奈江教授（発達障害児者支援モデル事業マネージャー・のびっこクラブ講師）やのびっこ保護者担当職員と相談を行い、その間子どもはのびっこ子ども担当職員とプレイルームで遊び、正午頃に終わる。

座学及び「のびっこクラブ」に参加した8人の現任者には、2月17日に松島町文化観光交流館で行われた「平成28年度宮城県発達障害児者支援会開発事業報告会 in 松島」において、「発達支援者基礎講座修了証書」を授与した。

(2) 保護者及び現任者の参加しての感想

2グループ各5回の「のびっこクラブ」を実施し、保護者、現任者に毎回感想を自由記述で書いていただいております、その内容は表5のとおりである。

イ 保護者

お子さんについては「家では負けたことについて怒ったりするが、今日は我慢できた（10月14日：保育所G第2回）」、「2回目で部屋に入らないと思っていたが入って、前回やったことも覚えていたようで出来たことに驚きました（11月17日：幼稚園G第2回）」、「のびっこクラブを楽しみ（11月11日：保育所G第3回）」、「家からのびっこクラブの写真を見せて伝えると行く意欲を見せていました（12月15日：幼稚園G第3回）」、「お友達が活動している時に励ましたり、応援する姿（1月27日：保育所G第5回）」、「朝から「のびっこ」に反応し、おもちゃの片付けから靴、服などを自分でやる気を出していました（2月16日：幼稚園G第5回）」と回を追うごとに成長する子どもの姿が見られた。

保護者自身については「楽しくやっている様子を見てうれしかった（11月17日：幼稚園G第2回）」、「気持ちが楽になってきた（11月11日：保育所G第3回）」、「前回アドバイス頂いたことを参考にさせてもらって、定期的に聞く機会があると生活していても気持ちが楽になっています（12月15日：幼稚園G第3回）」、「落ちついて子どものことを見られるようになりました（2月16日：幼稚園G第5回）」、「今回で最後でしたが、参加できて良かったです（2月16日：幼稚園G第5回）」と子どもの姿を見て元気が出たり、相談を通して安心する姿が見られた。

ロ 現任者

現任者の回答からは「大集団から小集団に環境が変化することで本来の姿で活動することができ、今まで見るができなかった子どもの新たな力を見つけることができたことが発見（9月30日：保育所第1回）」、「子どもの好きなこと、興味や関心を知ることが普段の保育と同じように大事なことだなと感じました（11月17日：幼稚園G第2回）」、「子ども達の発達段階をしっかりと踏まえて遊びの素材を選定する難しさを感じた（12月15日：幼稚園G第3回）」、「子ども達の笑顔がとても印象的で、集中力が伸びている（12月9日：保育所G第4回）」、「発語が多くなっており、興味を持って活動に取り組んでいた（1月19日：幼稚園G第4回）」、「一人ひとりの発達特性の違いを感じ、それだけ支援は難しい（2月16日：幼稚園G第5回）」と毎回子どもの成長を感じたり、学びがあったことが見られた。

表 5 保護者及び現任者の感想

			第 1 回
			9 月 3 0 日 (金)
保育士 G	保護者	お子さんについて	・場所、人に慣れるまで少し時間がかかります。 ・勉強等は好きであるようだ。お友達との関わりや、日常生活についてできないところがあるので、そこの様子の関わり方について知りたい。 ・何か達成できた時、とても嬉しそうな顔をしていたので、良かったです。
		御自身について	・このまま様子を見て大丈夫なのかどうかについて知りたい。 ・色とかものの名前とかの教え方が勉強になりました。
	現任者	参考になったこと	・私が勤務している保育所の子どもが参加していたのですが、保育所での姿とは異なり、いきいきと参加している姿に大変驚きました。<u>大集団から小集団に環境が変化すること</u>で本来の姿で活動することができ、今まで見ることができなかった子どもの新たな力を見つけることができたことが発見であり、保育の中でも活用できることと感じました。 ・構造化の具体的な方法について知ることができました。発達障害の子に対してどのように対応したらよいのか分からないことが多く、実践したことで少し理解できたように思います。 ・子ども一人一人に合わせ、どのような支援を行うと良いのか、<u>全体への支援と個別の支援との違い</u>について学ぶことができました。また、子ども達への声の掛け方、活動の内容ややり方を知らせる方法についても実践を通して学ぶことができたので良かったです。 ・①絵カードを使つての移動のスムーズさ、②パーティションの場所の落ち着く雰囲気、③先生の言葉掛けと必要な手助けのタイミングを実際に学びました。
			1 0 月 2 0 日 (木)
幼稚園教諭 G	保護者	お子さんについて	・思っていたより出来ることが多く驚いた。 ・いつもと様子が違っていたので、少し不安なところがあったかもしれませんが、ただ、お勉強や本の読み聞かせのところは楽しくやっていたと思います。 ・今日は気持ち安定していたので、思ったよりできていた。いつも 2 回目以降ができない事が多いので、1 1 月ののびっこでどうなるか、今回だけでは判断できません。
		御自身について	・関わり方のコツ、しかり方など勉強していきたい。 ・私自身どのようなことをするのが分からず来てみたのですが、何とか過ごすことができてよかったです。
	現任者	参考になったこと	・何をするにでも、気づきが必要で、いろいろな工夫が必要だということ。 ・カードの提示の仕方。 ・タイミング、間が重要一話の仕方 ・一人一人の発達の差があり、その子達に合わせて臨機応変に対応していくことの大切さ。 ・待つことが苦手なので、テンポよく進めること。 ・自立課題のスムーズな進め方（机や物の配置、カード表示（1, 2, 3）など）。 ・実際のお子さんの姿を見て、次回からのかかわり方を考えることができました。 ・個別支援の仕方を学べて良かった。その子、その子なりに見えること、見方が違っていて、答えは子どもが教えてくれていることを実感しました。 ・子どもの動きが様々であり、具体的な対応が勉強になりました。保護者の方同士が悩みを話し合い共感し合っている姿が良かったです。

			第2回
			10月14日（金）
保育士G	保護者	お子さんについて	・みんなと一緒に何かをするというのが、苦手のように感じます。 ・前回よりは慣れたかなと思います。 ・玉入れで、自分の入れた数が少なかった。<u>家では負けたことについて怒ったりするが、今日は我慢できたので少し柔軟に考えられたのかなと思う。</u>
		御自身について	・子どもへの促し方が勉強になりました。 ・前回1回目で、2週間ぐらいの間に、保育所の様子を聞くと、一人で着替えられたとか、食べられたという話も聞けて、私自身も少し気が楽になってきた。
	現任者	参考になったこと	・今日は、主に活動を進めさせていただいた。分かりやすくはっきりした言葉を用い、伝えるのに、時に迷う場面があった。他の先生方に指導をいただきながら実際に前に立って保育を進めたことが、何よりも大きな経験になった。 ・前回の経験を踏まえて、活動の内容や課題内容を選択したことで、子ども達も楽しんで参加する姿が見られたので、子ども達にとって環境の設定をし、構造化していくことの大切さに改めて気づけた。 ・<u>前回の反省を元に改善した所が良い方向にいったこともあり、そうでないところもあり、話し合うことの大切さを感じました。</u>前回よりも活動がスムーズに進み、笑顔が見られました。構造化の大切さ、子ども達にとっての分かりやすい環境にすることによって笑顔が増えることを学びました。
			11月17日（木）
幼稚園教諭G	保護者	お子さんについて	・初回よりも椅子に座ることを嫌がらずスムーズでした。次回はもっと楽しく色々できそう。 ・前回に比べると今日の方が少し落ち着かない様子でしたが、個別の勉強のところは落ち着いてできたと思います。 ・<u>2回目で部屋に入らないと思っていたが入って、前回やったことも覚えていたようで出来たことに驚きました。</u>
		御自身について	・楽しくやっている様子を見てうれしかった。次回も楽しみです。 ・前回より少し落ち着かない感じと、前回もそうでしたがボールを転がすところがあまり上手にできないようでした。 ・前回よりも子どもが成長していることが嬉しかった。
	現任者	参考になったこと	・活動の設定の仕方がとても大事で、同じ活動をするにも個別のめあてを持ってやっていくこともあるのだということが分かりました。また親御さんの気持ちあつての参加なので、両方の気持ちを大切にしながら、がんばりたいと思いました。 ・個別の課題のやり方を学べました（スケジュール変更。○△×）。楽しいと一人一人が思えることなると午後のワークで自分なりに考えることができ、よかったです。 ・中心活動の工夫、子ども達の興味やツボを理解して選ぶ活動を考えることの難しさや大切さを感じました。次回はみんなが楽しんで取り組んでもらえるといいなと感じます。 ・個別課題を選ぶ時、3つの課題のうち、2つ目にやや難しいもので、最後は簡単に楽しめて成功体験で終わることの大切さを学びました。 ・<u>子どもの好きなこと、興味や関心を知ることが普段の保育と同じように大事なことだなと感じました。</u>前回に比べて、意欲的に活動する姿が見られていたので、前回ののびっこクラブを終えてからの反省会や今回の準備の際に先生方と色々な姿を想像して用意できた点が良かったのかなと感じました。 ・お母さん方か専門の先生方の助言で安心感を得ることができているのが良い。職員の研修も兼ねながら月1回で支援を行う「のびっこクラブ」はとても意味合いが大きい。

			第3回
			11月11日（金）
保育士G	保護者	お子さんについて	・今朝来る時に、<u>のびっこクラブを楽しみ</u>と言っていて、始めてからとても楽しそうでした。あと2回で終わるのをさびしいなとも言っていました。 ・少しずつですが、指示に従えるようになり、良かったです。 ・今日は親の椅子も用意されていたので、椅子に座ってくれました。
		御自身について	・やはり、<u>子どもが楽しみ</u>と言ってくれたり、ニコニコしてくれると親としても元氣になれます。 ・以前は息子の事でとても悩んでいましたが、<u>気持ちが楽になってきました</u>。 ・だんだんと子どもも慣れてきたので、良かったです。
	現任者	参考になったこと	・今回は、主として活動を進めさせていただきましたが、主の活動の進め方の難しさを感じました。ボーリングゲームの中で、終わることを上手に伝えることができず、苦戦したが、藤原先生にボールを片付けて頂いたことで終了を知らせることができ参考になりました。言葉で伝わらなくてもちょっとした配慮を行うことで、終わりを知らせられるように、他の活動でも考え方を少し変えたり配慮することの大切さを大変感じました。 ・3回目ののびっこクラブでは、子ども達も慣れたのか笑顔が多く見られ会話が増えた。保護者とのやり取りも楽しんでいたように感じる。スケジュールを示したことで、今日の終わりが分かり、ボーリングを楽しみに待つ様子が見られた。スケジュールを示すことの大切さを実感しました。 ・3回目のクラブ活動ということもあり、環境設定や自立課題の設定など子どもの姿を想像しながら進めていくことができた。予想されない行動を取る子もいたが、その子の姿を追うためにも職員が次回に向けて考えていくためにも良かった。スケジュールがあったことで、落ち着かなかった子が落ちついて職員の話聞く様子があったので、スケジュールの大切さがより感じられた。ボーリング活動では、投げ方が分からない子に対して、後ろから黒子のように投げ方を知らせていくと投げるのが良かった。 ・クラブを繰り返す行うことで、子ども達が参加を楽しんだり、どこか大人が期待している反応を察して行動できたりしている様子が印象的だと思った。母親達の表情にも変化が見られ、良かったと思う。親同士親しくなれていて、安心する。
			12月15日（木）
幼稚園教諭G	保護者	お子さんについて	・全体的にできたような。しかし他の興味があるものがあると、そっちに集中してしまっていた。 ・今日は前回よりは落ちついて出来たと思いますが、もう少し先生の話を開けばよかったと思います。 ・流れが分かっているようで、家からのびっこクラブの写真を見せて伝えると行く意欲を見せていました。楽しんでいるようでした。
		御自身について	・ついつい口出ししてしまった。もう少し余裕を持って見守りたいと反省。 ・前回よりは子どもが落ちついて行動することができたので、良かったです。もう少し先生の話を開けばいいと思います。 ・前回アドバイスいただいたことを参考にさせてもらって、定期的に聞く機会があると生活していても気持ちが楽になっています。
	現任者	参考になったこと	・子ども達の発達段階をしっかりと踏まえて遊びの素材を選定する難しさを感じた。紙芝居ひとつにしても枚数を減らし、言葉を変えて、対象の子に合わせることでうまくいくということ。 ・全体活動の時に子どもの発達がバラバラの際、どこで終わりをするのか迷いました。Aくんが全体活動に取り組み始めて良かったが、絵合わせも難しいところがあると思った。自分の声が小さすぎるとも思ったので、もっとはっきりと言葉を言いたい。やってみて分かったことがあった。 ・個別課題、△□など順番に行ったものの、その認識がない子どもには課題の箱を1個増やし、最後の箱に次に行く部屋のカードを入れておくという学んでなるほどと感じました。残り2回、中心課題の検討を行いながら、取り組んでいきたいと思っています。 ・担当しているお子さんに関し、1回目や2回目の時とはまた違った姿を見ることができ、やり取りもできるようになったところに嬉しさを感じた。また、中心活動については、全員で楽しさや喜びを共有したいといういつもの保育観が自分の中にあることが分かった。一人一人が楽しいという気持ちを持って活動に参加できるように関わっていきたいと思う。 ・「視界に入れてもらたくないものは、隠す」、「事前に約束事を丁寧に知らせる」、「のびっこは多くの声掛けはらず、構造化なのだから、子どもが見てすぐ分かるシステムにならなければいけない」ということを学んだ。

			第4回
			12月9日(金)
保育士G	保護者	お子さんについて	・のびっこクラブをととても楽しみにしていました。会の中での話が増えてきたように思いました。 ・のびっこクラブの最初の頃はいすに座ることができませんでしたが、今日の教室では比較的座ることが出来たので成長したと思いました。 ・まだ、後の大人の人が気になるようですが、だいぶ場の感じもなれてきたように感じます。
		御自身について	・子どもが楽しそうな内容で、笑顔がたくさんみえました。 ・子どもの成長が見られてうれしいです。 ・あと1回ですが、最後までできればいいなと思います。
	現任者	参考になったこと	・のびっこクラブに参加している子ども達の笑顔がとても印象的な会で、集中力が伸びていることに驚かされた。今回の活動の中で、個別活動に新しい活動を取り入れたことで、苦手な部分を発見することができ、それに基づいて次の活動を決めることができました。そのようなことをフェイスシートに再度記入していくことで成長している部分か、今後伸ばすことが必要な部分かを見ることができ、次ののびっこクラブの課題へとつながっていけることをお知らせいただけたので、今後そのつながりを大切に、考えていければと思います。 ・今までの子ども達の様子を踏まえて、構造化の見直しをはかったところや活動内容を見直し、より子ども達が楽しめるように配慮したことで、子ども達も楽しんで参加してくれたので良かった。子ども達への声掛けの仕方やセカンドプランを持つことについてもっと学んでいき、より子ども達へスムーズに働きかけていけるようにしていきたい。 ・4回目ののびっこクラブでは、経験を重ねて構造化に慣れて成長した子どもの姿をみることができました。子ども同士のやりとりも見られ嬉しく思いました。今回もスケジュールの大切さを学びました。子どもにとって目で見てわかりやすくすることで、活動に集中できるのだと学びました。 ・いつもより長い活動時間、集中することができ、驚いた。子ども達の成長を感じる。子どもに負けぬよう、自分の専門性を高めなければと強く思う。
			1月19日(木)
幼稚園教諭G	保護者	お子さんについて	・体を使う場面では自分が興味のあるトンネル、線路などがあったので、楽しく出来ていたと思う。 ・落ち着いて行動出来ていたと思います。声を出す時はもう少し大きな声で言えばよかったです。 ・楽しそうにできていた。最初座るまでに時間がかかったが、色々なしかけで待てたり移動したり、子どもに効果的なことが分かった。
		御自身について	・今日は前回より口出しはせずなるべく見守るように心がけた。 ・落ち着いて行動できたのでよかったです。物の名前などをもう少し大きな声で言って欲しいです。 ・今回ほぼ声掛けせず見守ったが、それがかえってよかったのかな…?
	現任者	参考になったこと	・今日は子ども達の興味に合った活動がやっとできたように思います。なかなか全員が楽しく参加は難しいもので、試行錯誤です。でも、それが一番大事と思いました。 ・みんなでする活動の時に順番の仕方、表示の仕方を学びました。自立課題を考える時にBくんはどの程度なのか？できることを望みすぎたように思いました。実際にやってみている時に3つ目課題の数を減らして対応できたことがよかった。前回の反省が活かされた感じがありました。 ・今回は初めて活動を進める方になりましたが、視覚教材や、繰り返しの言葉が出てくる紙芝居などを通して3人それぞれ表出する姿が見られ、目がキラキラしている姿もあり、良かったです。中心活動では、予想外の姿もあったものの、臨機応変な対応が必要だと思っています。順番を守ることを伝える方法として、写真活用、その使い方をアドバイスもらいましたが、何でもそれを使う意味を深く考えることが大切だなと学んでいます。 ・担当しているお子さんが前回よりさらに発語が多くなっており、興味を持って活動に取り組んでいた様子も見られ嬉しく感じました。まあ、のびっこクラブの活動の流れがパターンとして分かりやすいからなのか課題が終わると継ぎの行動を理解し、自分から動き始めていた姿があったので、パターン化することの有効性のようなものを感じました。 ・子ども達が心から楽しいと思える活動で、子どもの表情も今までで一番の笑顔だった。先生方の頑張る意識が周りにも伝わり、何というか、感動的だった。

			第5回
			1月27日（金）
保育士G	保護者	お子さんについて	・お友達が活動している時に励ましたり、応援する姿が嬉しく思いました。 ・自分でできる事の楽しさを知って、自分でできるように少しずつなってきたかな。 ・最初は緊張している様子だったが、段々と場に慣れ声が出るようになっていた。<u>先生の話集中して聞けていた。</u>
		御自身について	・子どもがイキイキしている姿は親にとってもとても元気がでます。 ・子どもだけで色々チャレンジしている事を手伝わず見守っていきたいです。 ・はじめての場所が苦手な子なので、うまく出来るか心配だったが、上手にできていたので、安心した。
	現任者	参考になったこと	・藤原先生がお話になられた目的、ねらいがしっかりといてれば相手の状況に合わせて変えられるということがとても参考になりました。本日ののびっこクラブではお休みの子どもが2人おり、代わりに希望園からのお子さんが2人入っていただいたが、いろいろ失敗はあったが、自分なりに目的やねらいは考えて持っていたので、進めることができ、目的、ねらいの大切さを実感した。 ・最後ののびっこでしたが、2人がお休みになり、1人に対しての活動を考えていた。希望園から2人のお子さんの参加していただき初めての子ども達だったが、楽しく活動することができた。その子どもに合った対応を考えることが大切なのだと学びました。 ・希望園の子も急遽2人参加し、「できるかな」と不安になったが、子ども達の我慢の力、適応の力がすばらしく、初めての教室でもしっかりとやれているのが驚いた。希望の親御さんにも、のびっこの中身を知ってもらう機会になり、全体的に良かったと思う。
			2月16日（木）
幼稚園教諭G	保護者	お子さんについて	・児童館のおもちゃで遊ぶのが前日から楽しみにしていたためか、最初からクラブの方には無関心だったような…。 ・みんなで参加する時にもう少し声を出したり、遊んでほしかったです。 ・朝から「のびっこ」に反応し、おもちゃの片付けから靴、服などを自分でやる気を出していました。
		御自身について	・今日で最後だったけど、これからもこのようなクラブを続けてもらえたら…と思う。子どもにとっても自分にとってもとても良い機会になったと思う。 ・落ちついて子どもの事を見られるようになりました。 ・のびっこ効果を感じています。母親の気持ちも反映しているのかな？とも思いました。<u>今回で最後でしたが、参加できて良かったです。ありがとうございました。</u>
	現任者	参考になったこと	・準備した遊びの素材に先生のアドバイスによるちょっとした工夫遊びがより楽しくできるようになりました。それによってねらいもしっかり定めることができました。 ・楽しいと言って遊んでいる姿を見て嬉しくなりました。今回改めて<u>一人一人の発達特性の違いを感じ、それだけ支援は難しいものなのだと思います。</u> ・活動のねらいを立てることが最後まで難しく感じました。みんなで楽しむということだけでなく、例えば、ハンガーなら手先を使えるか、器用さなどの狙いを持つ。みんなで遊ぶ時なら、最後の終わりで、Uターンを教えるスキルになったり、赤い車が出てきてあたりが分かるかなど、理解に目を向けるなど、ポイントをたくさん教えてもらい、まだまだ勉強が必要で、視点を学ぶ必要があると感じました。 ・今回活動を進めてみて、改めて事前準備の大切さを感じました。物的な用意だけではなく、言葉掛け1つひとつシンプルに伝わりやすくなるよう考えておく必要があるとまなびました。 ・お母さん方からのお話の中で、「のびっこにくると子どもの頑張りやパワーを感じることができる」、「子どもだけでなく、同じような悩みを持つお母さん同士で話す機会が持てて嬉しかった」という感想も聞かれ、のびっこクラブの活動が地域の子育てに貢献していることを実感しました。 ・くるくる課題の際に車に最後に色を塗って、当たりでもう一回できることが楽しく、嬉しいということも学べました。 ・Aくんが落ち着かない様子には原因があるんだろうと思って見られるようになり、その子その子なりの一步一步があると実感できた。そして、活動の内容も飽きたらどうするかを考えておくとか自分の支援の仕方柔軟に対応できたように思いました。耳をふさぐこと、歩き回ること、全て今日の子どもが教えてくれていると思いました。やった！！という言葉が嬉しかったです。最後にビデオを撮った時、Aくんの気持ちを少し分かったように思いました。近づけるって嬉しいですね。

(3) 保護者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析

2グループ各5回の「のびっこクラブ」に参加した保護者5人（1人は4回参加し、転居したので分析対象外とした）に事業開始前と、事業終了後にアンケート調査を実施した。アンケートは、「お子さんの発達・発育を理解している」「お子さんの行動について理解している」「お子さんの興味関心を理解している」「お子さんへの関わり方のコツを理解している」「お子さんの成長を促すための関わり方を理解している」「子育てについて自信がある」の6項目について「1 全く当てはまらない、2 少し当てはまらない、3 少し当てはまる、4 かなり当てはまる」の4択で自信の程度を尋ねた。対象者が5人と限られたこともあり、いずれの項目でも研修前後に有意な差は認められなかった（表6参照）。

表6 保護者アンケート結果（平均値）

	発達理解	行動理解	興味理解	関わり理解	成長促し	子育て自信
事業開始前	3.0	3.2	3.6	3.0	2.6	2.2
事業終了後	2.8	2.8	3.0	2.8	2.8	2.4

さらに保護者にはPOMS短縮版も実施した。POMSは「緊張」「抑うつ」「怒り」「活気」「疲労」「混乱」の6つの尺度から気分や感情の状態を測定する心理検査である。

「緊張」は5人中2人で明らかに改善、2人で変化がなく、1人は若干ではあるが増える傾向が見られ、全体としては差が認められなかった。「抑うつ」では2人で改善、2人で変化が無かったが、1人は明らかな増加が見られ、全体としては差がなかった。「怒り」は5人中4人で改善したが、1人は若干ではあるが増加し、全体としては差がなかった。「活気」も同様に5人中4人は改善、1名で増加がみられ全体としては差がなかった。「疲労」は5人中3人で改善、2名で増加が見られ、全体としては差がなかった。「混乱」は5人中3人で改善、1人で変化なし、1人で若干の増加が見られ、全体としては差がなかった。以上、5人と対象者が少なかったことに加え、保護者が抱える様々な家庭状況、お子さんの年齢や遅れの程度などの影響も大きいことが推測され、全体としては改善傾向にあるものの、個人差が大きい結果となった（表7参照）。

表7 POMS保護者結果（Tスコア平均値）

	緊張	抑うつ	怒り	活気	疲労	混乱
事業開始前	46.2	44.0	52.6	45.8	46.2	52.2
事業終了後	43.2	43.0	48.6	47.2	47.6	50.4

(4) 現任者の「のびっこクラブ」参加前後のアンケート調査の分析

2グループ各5回の「のびっこクラブ」に参加した現任者（保育士、幼稚園教諭）8人に事業開始前と、事業終了後にアンケート調査を実施した。アンケートは、「発達支援に関する知識」「発達支援に関するアセスメントスキル」「療育課題に関する工夫」「一人一人に応じた支援への配慮（環境調整）」「家族の思いへの理解」の5項目について、「1 全く自信がない、2 少し自信がない、3 少し自信がある、4 かなり自信がある」の4択で自信の程度を尋ねた。その結果、「発達支援に関する知識」「療育課題に関する工夫」「一人一人に応じた支援への配慮（環境調整）」と繰り返し研修を通して学ぶ機会があった3項目では自信が増す傾向が認められた（サイン検定 $.05 < p < .01$ ）。他方、その機会が少なかった「発達支援に関するアセスメントスキル」は全体として増えてはいるものの優位には至らず（ $p=0.125$ ）、直接は取り上げなかった「家族の思いへの理解」はほとんど変化がなかった（表8参照）。

表8 現任者アンケート結果（平均値）

	発達知識	アセスメントスキル	療育工夫	環境調整	家族思い理解
事業開始前	1.88	1.75	1.63	2.00	2.75
事業終了後	2.63+	2.38	2.25+	2.75+	3.00

(5) 保育所長・幼稚園長・児童館長アンケート調査結果

事業終了後に3保育所、3幼稚園、1児童館の管理者に郵送によるアンケート調査を実施した（7名送付。回答率100%）。

アンケートは、のびっこクラブに参加した職員について「発達支援に関する知識」「発達支援におけるアセスメントスキル」「療育課題等における具体的な工夫」「1人1人に応じた支援への配慮（環境調整）」「家族の思いへの理解」の5項目について「1全く深まらなかった、2あまり深まらなかった、3少し深まった、4かなり深まった」の4択で管理者の目から見た深まりの程度を尋ねた（表9参照）。その結果、いずれの項目も「少し深まった」と「かなり深まった」の回答であったが、特に、療育工夫、発達知識、アセスメントスキルが深まったとの回答になっている。現任者の結果では発達知識と療育工夫、環境調整において、事業開始前と比べて事業修了後に自信が増す傾向になっており、現任者が変化したと感じる項目は、管理者の目からも深まったと感じる結果となっている。

表9 管理者アンケート結果（管理者の目から見た参加職員の深まり）

問い	全く深まらなかった	あまり深まらなかった	少し深まった	かなり深まった
発達知識	—	—	2人	5人
アセスメントスキル	—	—	2人	5人
療育工夫	—	—	1人	6人
環境調整	—	—	3人	4人
家族理解	—	—	4人	3人

また、「事業において、代替職員が配置されたことについての御見解をお書きください。」、「のびっこクラブでの学びが貴保育所・幼稚園・児童館における実践において活用された例がありましたらお書きください。」、「本事業を通して貴保育所・幼稚園・児童館において見られた変化はありましたか?」、「この事業についての感想をお書きください。」の4点についても自由記載によるアンケート調査を実施した（表10参照）。

表 10 管理者アンケート調査結果（自由記載等）

問い	回答
代替職員配置への御見解	・代替職員が配置されたことで、事業に参加する上で安心して参加できた。特に、同じ職場で以前働いていた OB,OG の先生方が手伝いに来ていただけたので、職員間のコミュニケーションも円滑に進めていくことができた。 ・研修が一日がかりと言うことで、代替職員の配置がなされたことはとてもよかった。保育所で入不足だと研修の場に参加することに対して気が引けてしまうことがある。また、現状として出したくても出せない場合もある。 ・代替職員が来てくれることで、他の職員に気兼ねすることなく安心して研修に出ていくことができた。 ・職員が少ない体制で保育を行っているので、代替職員が配置されたことは、どの園にとっても助かった。 ・代替職員の配置は現場の負担軽減を図る上で必要なことだと思います。のびっこクラブに参加した職員が安心して研修を受講する上で必要な対策が取られたことに感謝している。 ・代替職員の配置は現場の負担軽減を図る上で必要である。のびっこクラブに参加した職員が安心して研修を受講する上で必要な対策が取られたことに感謝している。 ・園運営において、園児の安全確保のためにも大変助かった。自園では特別支援補助員がおり、日頃から親しんでいる職員が配置され、安心して保育することができた
実践における活用例	・保育環境の構造化を図っていきけるように、子ども達にとって分かりやすいよう視覚的に知らせていく環境を整えているが、人的配置や建物の構造上難しいところも多くあるため、さらなる工夫が必要と感じる。 ・スケジュールなどは以前から行っていたが、その示し方や表示の方法をよく理解できた。目に見えるようにビニールテープで範囲を示すことで並んでいる時や待っている時のときのトラブルを減らすことにつなげている。 ・報告会で発表されたような取組が保育所の中で実践されている。 ・のびっこクラブに参加している職員と一緒に本園の職員も活動に使うものを一緒に作っていた。支援児を担当の経験が浅い職員と一緒に作りながら、作っているもののねらい・意味などの話をしながら作ったことが今後の良い参考になった。 ・目から入る刺激に弱い子にはパーテーションを使用したり、切り替えの苦手な子にはスケジュールの提示、終了を知らせるために終わりの紙を箱に入れるなどしてその子に合った支援方法を模索して実践に励んでいる。 ・のびっこクラブに参加した園児の保護者が「カンファレンス」に参加したことにより支援の必要性や本児への理解が深まり、担任との連携が取りやすくなった。
保育所等での変化	・保育者全体の意識を高めていくには、まだまだ時間がかかる。しかし、事業に参加できた職員の意識や子どもたちを見る目は以前より高まった。 ・発達障害についての理解を深めようとする姿勢が職員に以前より浸透した。子どもたちのことについて保育士同士で話し合う機会も増えた。 ・気になるお子さんが落ち着かない時など、プットイン課題を使って気持ちの切り替えを行おうとする様子が見られている。 ・支援を要する幼児の担任だけではなく、職員全体で把握し、共通理解を持って子ども達に接している。また、水道前やグループごとに集まる場所にマークや枠などを作り、支援を要する子ども以外の子ども達も見て自分で動けるような構造化の環境設定を行っている。 ・支援を必要とする子ども（特にグレーゾーン）の支援方法について以前は漠然としていたところがありましたが、のびっこクラブを通して学んだスキルを保育に取り入れ実践することで少しずつではありますが自信がついてきたように思える。研修に参加しない職員も間接的ではあるがいろいろなことを知る機会が増えていると感じる。 ・参加職員の支援に対する意識や理解が高まった。しかし、学んできたことを実際のクラス運営の中で活用する姿は未だ見られていない。通常業務と平行して進めていく中で、他の職員への伝講がなかなか進まずにいる。
感想	・この事業を通して得た知識と技術を今後も保育現場で活かしたい。 ・発達障害についてそれぞれが考える良い機会になった。できることから子どもたちのためにやっという気持ちに自然になっていった。 ・今回の事業がこれからの松島の子どもたちへの支援の基になっていく。松島町の幼稚園、保育所がここ 2, 3 年で体制が変わり若い世代が中心になっていく。松島がモデル地域になってとても良かった。 ・年々、支援を必要とする子ども達が増加している。早くから本人に合った支援で発達を後押しできる環境とそれらを支援する人づくりが急がれると思う。今後もこの事業が継続していくことを望む。 ・支援の必要な幼児の状態の理解と、支援方法について非常に勉強になり職員の力となった。全職員で参加したい。

代替職員の配置については、「事業に参加する上で安心して参加できた」、「現場の負担軽減を図る上で必要」、「園児の安全確保のためにも大変助かった」などの意見があり、大変好評であった。

実践における活用例については、「目に見えるようにビニールテープで範囲を示すことで並んでい
る時や待っている時のときのトラブルを減らすことにつなげている」、「のびっこクラブに参加して
いる職員と一緒に本園の職員も活動に使うもの（自立課題）と一緒に作ったことが、若い職員の参
考になった」、「目から入る刺激に弱い子にはパーテーションの使用・スケジュールの提示・終わりの
紙を箱に入れる」などの取組があり、「のびっこクラブ」での経験が保育現場に活かされている。

保育所等での変化については「職員の意識や子どもたちを見る目の高まり」、「子どもが落ち着か
ない時に自立課題を使った働きかけ」、「職員に自信が付いてきた」などの変化が見られており、で
きることから取り組んでいこうという職員の意識向上につながっている。

感想については、「知識と技術を今後も保育現場で活かしたい」、「今後もこの事業が継続していく
ことを望む」、「支援の必要な幼児の状態の理解と、支援方法について非常に勉強になり職員の力と
なった」などの意見があり、今回の取組をさらに継続可能な仕組みとして取り組んでいくことの大切
さが挙げられている。

（6）代替保育士・幼稚園教諭アンケート調査結果

事業終了後に本事業に代替保育士・幼稚園教諭（以下、「代替保育士等」という）に郵送によるア
ンケート調査を実施した（8名送付。回答率87.5%）。

アンケートでは、事業について感じられたことに関して、代替保育士等に「依頼の仕方」「事前説
明」「賃金」「依頼頻度」の4項目について「1 不適切だった、2 やや不適切だった、3 やや
適切だった、4 適切だった」の4択で尋ねた（表11参照）。その結果、いずれの項目も「やや適
切だった」と「適切だった」の回答であった。賃金は時給1,000円と交通費支弁であり、依頼
頻度は月1～2回程度だったが、引き続きこのような方法で依頼することは可能と思われる。

表11 代替保育士等アンケート結果（事業について感じたこと）

問い	不適切だった	やや不適切だった	やや適切だった	適切だった
依頼の仕方	—	—	2人	5人
事前説明	—	—	2人	5人
賃金	—	—	—	7人
依頼頻度	—	—	1人	6人

また、代替保育士等として勤務された中で感じられたことに関して、代替保育士等に「現場での
仕事への不安（勤務前）」「現場での仕事への不安（勤務後）」「松島町の支援に寄与できることのや
り甲斐」「仕事を通じたやり甲斐」「職員間のコミュニケーションの取りにくさ」「子どもの対応の難
しさ」の4項目について「1 不適切だった、2 やや不適切だった、3 やや適切だった、4 適
切だった」の4択で尋ねた（表12参照）。

仕事への不安は勤務前から「あまりなかった」、「なかった」と回答する割合が高く、勤務前の不
安が「あった」、「少しあった」と回答した方も勤務後は「あまりなかった」に変化している。

表12 代替保育士等アンケート結果（代替職員勤務の中で感じたこと）

問い	あった	少しあった	あまりなかった	なかった
仕事への不安（勤務前）	1人	1人	1人	4人
仕事への不安（勤務後）	—	—	3人	4人
松島町支援寄与のやり甲斐	2人	3人	—	2人
仕事のやり甲斐	2人	3人	—	2人
職員間のコミュニケーション困難	—	1人	2人	4人
子どもの対応困難	—	1人	2人	4人

「松島町の支援に寄与できることのやり甲斐」、「仕事を通じたやり甲斐」は「あった」、「少しあった」と「なかった」がおおむね同数であり、やり甲斐を感じられなかった方もいた。

「職員間のコミュニケーションの取りにくさ」、「子どもの対応の難しさ」は「あまりなかった」、「なかった」の回答が多く、スムーズに対応できている。

また、「事業において、代替職員が配置されたことについての御見解をお書きください。」、「この事業についての感想をお書きください。」の2点についても自由記載によるアンケート調査を実施した（表13参照）。

表13 代替保育士等アンケート調査結果（自由記載等）

問い	回答
代替職員配置への御見解	・仕事を離れて日数が経ち、役に立つのか不安だったが、実際に保育士として一日過ごし、そのことにより安心して研修に参加できることを知り、<u>自分のためにも、また研修参加者にとっても良い結果になったこと</u>を感謝している。 ・職員一人が抜けることにより現場は手薄になり、保育上支障を来すことになると思うので、<u>代替職員は必要だった</u>と思う。 ・研修に出る先生が安心して研修に参加できるという点で良かった。 ・正職員が少なく、一人の職員が研修に出かけてしまうと手薄になるので、代替職員は必要だった。 ・良かったと思う。 ・現場にとっても代替職員は必要であったと思う。<u>同じ保育所に配置されたことにより、働きやすかった。</u> ・保育士が何人か欠けた状態で、残った先生で子ども達を保育するのは、いつも以上に大変なので、研修の時に、保育に代替職員が配置されることは大変よいことだと思う。
感想	・素晴らしい事業であった。 ・2月17日の報告会に参加し、実践報告、シンポジウム、また自立課題の制作物の展示等、どれを見ても聴いても、みなさんの頑張り、学びの深さに感動しました。ただ、<u>これからそれをどう伝え、共有し進められていくのか、これで終わらず続けていくことの難しさを感じる。</u> ・事業は大変素晴らしく、とても良いものだと思うので、応援している。 ・支援を要する子どもたちのために、<u>松島町の先生方が専門的知識を学ぶ機会となり、とても良い事業だったと思う。</u> ・発達障害児の支援について、具体的に学ぶ大変良い取組だったと思う。今後は若い先生方も研修できるとよいのではないかと思う。 ・支援を要する子どもが増えている中で、専門的な知識を学ぶことは大切である。<u>学び実践したことを先生方がそれぞれの園で主導的立場で活かされてこそ初めて成果が出たと言える。</u>多くの先生に学ぶ機会を与えてほしい。 ・勤務中にどんな研修が行われていたか、資料をいただいたことにより知ることができたことで、やり甲斐を感じることもできた。 ・発達につまづきのあるお子さんが集団生活をしていく上で、先生方の専門的な援助が必要なので、先生方にも学んでいただく機会は大変ありがたいことだと思う。

代替職員の配置については、「自分のためにも、研修参加者にとっても良い結果になった」、「代替職員は必要だった」、「同じ保育所に配置されたことにより、働きやすかった」などの意見があり、代替職員にとって、現任者の学びを保証するために役に立てたというやり甲斐につながっている。

感想については、「これからそれをどう伝え、共有し進められていくのか、これで終わらず続けていくことの難しさを感じる」、「学び実践したことを先生方がそれぞれの園で主導的立場で活かされてこそ初めて成果が出たと言える」との意見があり、学びを次の世代に伝えたり、実践を園の中で活用することに継続して取り組むことへの期待が挙げられている。

【研修参加前の障害児保育に対する思い】

- ・自閉スペクトラム症の特徴を持ったお子さんの個別対応を以前行ったことがあり、担当保育士として保育に当たっていた 経験から、障害児保育に対する理解を持っていたが、保育士養成校で学んだことや専門書に書いてあること以外に、実際に専門的な資格を持った方から知識を学んだわけではなかったため、今回の研修に参加できることを知り、とても嬉しく感じた。
- ・自閉スペクトラム症の特徴を持ったお子さんに対して、どのような対応が有効であるか、どのような対応をすると子どもの育ちを促していけるのかが明確には分からなかったため、今回の研修で関わり方や支援の仕方を学べたらと考えていた。

【座学と自立課題作りを通して学べたこと】

- ・保育者が子どもの特徴を振り返り『7つのステップシート』に書き出してみることで情報を整理することができ、子どもが抱えている困難さやつまずきに気づくことができるようになった。また、情報を整理していく中で、保育者の困り感や子どもにどのような姿を期待するかなどを明確にでき、日常の保育の中でどのような支援を行うと良いか、ヒントを得ることができた。
- ・自立課題づくりでは、『ブットイン』や『マッチング』などの製作を行い、それぞれの課題にどのような特徴があるのかを知ることができた。自立課題というものを以前から知っていたものの、どのように使うと良いのか、又、子どもにとって自立課題がどのような意味を持つのかが分からなかったが、藤原先生の指導の中で『自己評価を高める』『気持ちの切り替えができる』という意味を持つことを知ることができた。
- ・今回の研修では、松島町の保育所と幼稚園の職員が一緒に取り組むことができたため、研修を通して交流を深めていくことができた。保育所と幼稚園という垣根を越えてお互いの保育観や子育て観に触れていく中で、より松島町で子どもと関わる職員としての意識も高めることができた。

【のびっこクラブを通して】

- ・座学を通して学んだことを実際に子ども達と関わる中で実践していったが、指導案等の計画どおりに上手くいえないことも多くあり、その都度どのような働きかけ方をすべきか、どのような手立てが有効であるかなど、研修参加者の職員同士で話し合いながら進めていくことができた。
- ・自立課題を実際に子ども達に使ってもらう場合は『簡単にできるもの』『少し挑戦できるもの』『すっきりと終わることができるもの』など、子どもの様子や育ちに合わせて課題のレベルや数を加減していくことも必要であるということも知ることができた。
- ・遊び方やルールなど子ども達が分かりやすく理解できるように保育者が「モデル」を示し、子ども達に視覚的に情報を伝えていくことで、認識することができると改めて知ることができた。しかし、子どもが育ちの中で経験していない動作や、発達のレベルが動作のレベルに達していない場合はモデルを示すだけでは不十分であるため、その場合は保育者が『黒子』となり、子どもの後ろから手を添えて教えてあげるなどの支援の仕方が有効な手段であることも学ぶことができた。
- ・のびっこクラブを通して子ども達同士の関わりも増え、お互いの名前を呼び合ったり、友達の頑張りを応援する姿が出てきたり、子ども達同士の関わりの変化を見て取れたことを嬉しく感じた。子ども達同士が関わりを持てるようになっていった姿から、のびっこクラブは個としての成長だけでなく集団としての育ちを促すことができるのだと強く感じた。

【今後の課題と目標】

- ・今回の研修を通して学んだことを、保育者がそれぞれの職場で他の職員に伝達していくことや実際に子どもの環境を『構造化』していくことが重要な役割となるため、子ども達一人一人にとって過ごしやすい環境を整えていけるようにしたい。そのためにも、職員の意識を高めていくと共に、子ども達一人一人の情報を各職員が共有し共通の理解を持って支援に当たっていけるようにしなくてはならないと考える。しかし、建物の構造上や職員の人数により、構造化や個別対応などの支援が現実的に難しいところも多々あるため、どうすれば良いかが分からずに先に進めないところもある。

- ・大きな集団の中での生活となると、定型発達児と自閉スペクトラム症の特徴を持った子どもが一緒に生活を送るため、年齢が同じであっても発達のレベルが合わない場合も多く、どの子のレベルに合わせて日常の活動や生活の水準を決めていかなくてはならないのかが分からず、正直迷ってしまう。
- ・定型発達児にとっては、発達レベルを下げた取組に満足できない子もあり、子どもの育ちを妨げてしまっているのではないかと保育者としての不安もある。
- ・また、特徴を持った子のレベルを定型発達児に合わせてしまうと、十分に活動を楽しんだり満足したりできなくなり、集中して取り組めないことから、多動や奇声、自傷行為や他傷行為などにつながりかねないケースもあるため、特徴を持った子にはあまり無理をさせたくないと考えてしまう。
- ・このことから、大きな集団を保育するうえでは保育者一人では対応できることにも限度があるため、今後の保育の在り方としてどのように問題を解決していくかを職場全体で考えていかなくてはならない。
- ・日常の中で子ども達の困り感や保育者が困るところは、どのような場面でどのような要因があるためかを振り返り、子ども達も保育者も困り感を減らしていくための小さな構造化を行うだけでも、子ども達の生活意欲や自己肯定感を高めていけるため『スモールステップ』を目指しながら日々を過ごしていきたい。

支援現場における工夫例

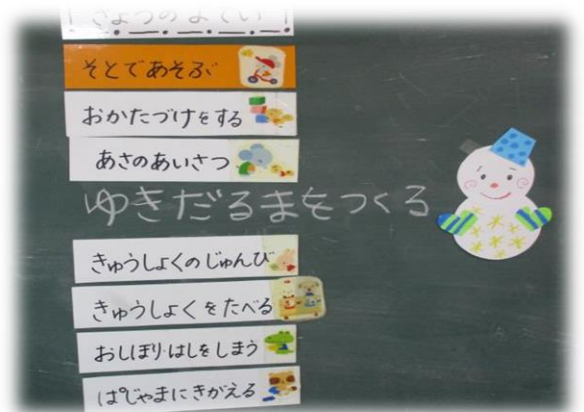
磯崎保育所 「先生達の顔写真絵カード」



松島保育所 「遊戯室のステージで座る位置」



松島保育所 「一日のスケジュール」



高城保育所 「手洗い場の並ぶ位置」



高城保育所 「時計を使ったスケジュール」



3 ペアレント・メンターの育成支援

(1) ペアレント・メンター育成の取組経過及び概要

宮城県では平成20年11月に社団法人日本自閉症協会と宮城県自閉症協会が主催したペアレント・メンター養成講座が開かれたが、その後ペアレント・メンター研修が県内で開かれることはなかった。そのため、ペアレント・メンターの育成についての関係者の期待が大きかった。

平成27年度から開催された宮城県発達障害者支援体制整備検討会においても、ペアレント・メンターの育成の必要性について議論となった。そのため、平成28年度は啓発、育成及びペアレント・メンターに関する検討を行った（表14参照）。

表14 ペアレント・メンター研修及びペアレント・メンター検討会

	日時	内容	参加者
第1回	平成28年11月1日（火） 午前10時30分～午後2時	ペアレント・メンター啓発研修 発達障害の家族支援とペアレント・メンター活動	22人
第2回	平成29年1月24日（火） 午後1時～午後5時	ペアレント・メンター養成研修① オリエンテーション・自己紹介 発達障がいの基礎知識 発達障がいの家族支援	26人
第3回	平成29年2月1日（水） 午前10時～午後4時	ペアレント・メンター養成研修② リソースブックの作り方と地域活動 相談の技術とその基礎知識 ロールプレイ 修了証書授与式	26人 平成28年度宮城県ペアレント・メンター養成研修基礎講座修了証書授与者 17名
第1回	平成29年1月25日（水） 午前10時～午前11時30分	ペアレント・メンター検討会① 発達障害児者支援開発事業について ペアレント・メンターについて 宮城県におけるペアレント・メンターの検討	9人
第2回	平成29年2月9日（木） 午前10時～午前11時30分	ペアレント・メンター検討会② ペアレント・メンター研修会について 他県の取組の紹介 想定される課題と対応	9人

(2) ペアレント・メンター研修

ペアレント・メンター研修については特定非営利活動法人日本ペアレント・メンター研究会事務局長で鳴門教育大学准教授の小倉正義先生を講師に迎え、11月に啓発研修、1月と2月に養成研修を行った。

啓発研修では、障害理解や障害受容は家族によって違い、ゴールやプロセスも違うが、迷いながら歩んできた親の経験はかけがいのないものであること、発達障害の子どもを持つ親としての経験が地域のリソースに関してユーザー目線での情報提供は行政にも専門家にもできないことであること、メンターの話を通して将来の見通しを持ったり、祖父母の理解が進んだりすることもあり、親の会での活動とは支援対象を変えて支援を行えるメリットがあることなどの学びがあった。

メンターとして活動することで、自己実現が図れるメリットがある一方、デメリットとして時間

的（事前準備、子どもとの調整）、金銭的（ヘルパー利用や交通費）、能力的（難しいケースが振られる）、心理的（負担や疲労へのフォロー）な側面があり、メンター自身のブラッシュアップと活動を長く続けていける仕組みづくり（メンターへの支援体制）が必要となる。

養成研修では、メンターとして相談を受ける上で必要な技術を学んだり、ロールプレイ演習などを行った。

ペアレント・メンター啓発研修、養成研修①、養成研修②とも、9割以上の参加者が参考になった、やや参考になったと回答しており、満足度は高かった。研修会に参加した保護者、支援者のうちペアレント・メンターとして活動希望は92%、後方支援の可能性は62.5%であった（表15、16参照）。

表15 ペアレント・メンターとして活動する希望について（保護者対象）

項目	ぜひ活動したい	活動したい気持ちはある	あまり興味がなく活動しない	全く興味がなく活動しない	興味はあるが活動はしない
回答数	5（42%）	6（50%）	0（0%）	0（0%）	1（8%）

表16 支援機関としてペアレント・メンターの後方支援について（支援者対象）

項目	可能	やや可能	やや不可能	不可能	無回答
回答数	3（37.5%）	2（25%）	0（0%）	0（0%）	3（37.5%）

ペアレント・メンター養成研修を受講した17人の保護者には、研修最終日に「ペアレント・メンター研修基礎講座修了証書」を授与した。

（3）ペアレント・メンター検討会

ペアレント・メンター検討会では、県内での事業化に向けた話し合いを行った。事業を行うには既存の親の会の活動を尊重しながら、ペアレント・メンターにとって負担の大きくない事業から取り組んでいくことの重要性や、ペアレント・メンター事業において発達障害者支援センターが果たす役割について意見が出ている。平成30年からの事業化目標に向けて平成29年度も継続して話し合いを続ける予定である。

第3章 考察

発達の気になる子ども達に対して、子育て支援センター（児童館）を拠点とした早期支援体制を図ることを目的とし、健診ツールの導入支援、保育士・幼稚園教諭等の現任者スキルアップ研修の支援、ペアレント・メンターの育成支援についてモデル事業に取り組んだ効果として、以下の点が挙げられる。

- ①M-CHAT は健診場面において、健診担当者の支援の参考となった。
- ②発達障害児者支援は難しい、専門家でなければならないという意識があったが、子どもに分かりやすい声掛けや集中しやすい環境調整等の実践を通じて、保育士、幼稚園教諭、親などが療育支援に自ら取り組むことへの自信が付いた。
- ③早期発見（健診）から松島町での相談事業（巡回支援専門員整備事業）、療育（のびっこクラブ）、保育所・幼稚園での相談（巡回支援専門員整備事業）の流れができ、利用しやすい子育て支援センター（児童館）を中心とした支援体制ができつつある。
- ④支援者（巡回支援専門員による事例検討、のびっこクラブ、M-CHAT 勉強会）や保護者（のびっこクラブ、ペアレント・メンター研修会）に学ぶ機会ができたことで、スキルアップが図られた。
- ⑤組織を超えて現任者が集まり、支援について検討を重ね、実践することで、その知見を還元し、町全体の支援スキルの平準化を図る素地ができつつある。
- ⑥安心して現任者が学ぶためには、退職した保育士・幼稚園教諭がバックアップする仕組みが有効であった。
- ⑦ペアレント・メンターの育成を通して、宮城県の支援の幅を広げていく土台づくりに取り組むことができた。

社会資源の限られる地域においてもきめ細やかな支援を行うためには、地域の支援者が発達支援に取り組むことの重要性が示唆された。発達支援を専門家任せにせず、それぞれの立場で対象児者の特性を理解しながら支援を提供できれば、支援の切れ目を少なくすることができ、二次障害を防ぐことにもつながる。支援者は自らの専門性を不断の努力で高めるとともに、支援の受け皿を広げて、各機関の支援が重なり合うよう、地域支援体制を作っていくことが望まれる。

おわりに

東北文化学園大学医療福祉学部教授（発達障害児者支援モデル事業マネージャー）

藤原 加奈江

自閉スペクトラム症の出現率は年を追うごとに増えており、その対応が急務となっている。自閉スペクトラム症の困難さは感覚、認知、言語・コミュニケーション、記憶、実行機能、運動など多岐にわたり、また、非自閉症者とは質的な違いを持っていることも多く、支援にはまず、その違いを理解することが必要になる。さらにそれらの特徴に基づいた対応の工夫も学ばなければならない。不適切な対応による二次障害を防ぐためにも、早期発見・早期支援が重要となる。しかし多くの社会資源は都市部など限られた地域に偏ることが多く、地方の市町村は取り残されているのが現状である。今回のモデル事業は社会資源が少ない松島町で、早期発見・早期支援を実現する枠組みを作ること为目标としたものである。1歳6か月の健康診査で自閉スペクトラム症の検知度が優れているM—CHATの導入、そこから心理相談へつなげ問題の整理を行い、敷居の低い児童館での小集団療育「のびっこクラブ」を紹介するという流れを作った。ここでは保護者の不安や疑問に個別に答えるとともに、同様の不安を抱える他の保護者との交流、共に子供の特徴を理解する機会を提供した。参加者の数が5人と少なく、アンケートやPOMSでははっきりした結果はでなかったものの、保護者の感想のひとつに「子供のためにS市に移住することを考えていたが、こんな支援があるならば松島でも大丈夫なのだと思います。」というコメントがあり、支援の方向性が間違っていないことを実感した。

他方、保護者とともに乳幼児期の子供を育てる保育士、幼稚園教諭が子供の特徴や対応法を学ぶことも重要である。今回の事業では各保育所、幼稚園から現任保育士、教諭が選出され、「発達支援者養成研修」プログラムに参加した。このプログラムは自閉スペクトラム症に関する知識、評価、対応法を学ぶ5回の座学、問題解決のステップシート作成と自立課題作りを学ぶ5回の演習、「のびっこクラブ」での5回の実践からなっていた。演習と実践では「ねらい」は何なのかを明確にするよう求め、その目標が適切なのか、また、それを達成するための方法は適切であるのかを検討できるようにした。実践では直接的なアドバイスは控え、子供たちの反応を通して、自ら反省し、更に議論を深めて次の計画を立てることを重視した。その結果、先生方の対応スキルは回を追うごとに向上し、また、自ら保育所や幼稚園で応用するなど汎化の成果も見られるなど、予想をはるかに上回る結果となった。アンケートや自由記述の結果からも、力を入れて行った知識、対応工夫、環境調整への自信が増しており、主観的にもプログラムの効果が確認された。

短期間でここまでの成果を挙げられた理由として、児童館職員の献身的な取組、現任者の情熱に加え、厚生労働省のモデル事業を通じた後方支援、宮城県及び松島町の行政の力が極めて大きかった。代替保育士制度を取り入れ、保育所、幼稚園の協力体制を実現したことで、現任者が安心して取り組める環境を整え、保健師と保育士とが連携するパイプを作り、更に取り組んできた成果を町全体で共有する発表会を企画実行するなど、枚挙に暇が無い。

今後の課題としては「のびっこクラブ」で得たスキルを保育所や幼稚園などの現場で確実に活用していくためのスキルアップ研修と今回は育成段階までに留まったペアレント・メンターの現場での活用が挙げられる。更に「のびっこクラブ」の継続を通しての保護者支援、新たな現任者への研修を行うことで、保護者への支援が浸透するとともに、各保育所で複数「発達支援者養成研修修了者」が実現し、施設内での支援体制が強固になるものと期待できる。

松島町の「気になる子」への相談事業は、平成 13 年度の子育て支援センターの立ち上げと同時に始まった。講師は当時児童相談所で乳幼児精神発達精密健康診査事業を担当していた、今回事業で発達障害児者支援モデル事業マネージャーでもある臨床心理士の藤原加奈江先生だった。市町村の乳幼児健診に臨床心理士が携わることは珍しくないが、定期的にしかも継続的に相談業務に関ってもらうのはおそらく少ない。

始まって数年は、母親からの相談の比率が多かったが、次第に幼稚園や保育所からの相談件数がそれを上回るようになった。それは、現場の幼稚園教諭や保育士が、徐々に子どもたちの発達についての気づきや違いを察知する力がついてきたからと言える。

最近では、巡回の相談日は、午前中に幼稚園や保育所をまわって担任がアドバイスを受けるだけでなく、保育所がお昼寝の時間に幼稚園教諭と保育士が集まってカンファレンスを行うようになってきた。しかし、アドバイスを受けても実際にどうしたらいいかわからない、また、担任のみが学んでも翌年に担任が替わればまた振り出しに戻り、指導の継続ができず、障害児支援が保育のなかで特殊な支援であるという意識が影響してノウハウが蓄積されにくい状況があった。

専門の先生に頼るばかりでなく、何とか「自給自足」の支援ができないかを模索しているところに今回のモデル事業のお話があり、さらなるスキルアップのために職員で取り組んだ。

モデル事業の 3 本柱は、①発見の場としての M-CHAT を使った 1 歳 6 か月健康診査、②現任者の学びの場、③ペアレント・メンターの養成研修であった。この事業の提案により、「のびっこクラブ」を軸に「保健師」、「幼稚園」、「保育所」、「親の会」などの各々の担当が少しずつ関わりを持ち始め、点から線に、また線から面へと繋がっていく支援システムの有効性を実感した。

「のびっこクラブ」の開催場所が、新しく誰でも遊びにすることができると子育て支援センター（児童館）であったことも敷居を低くできた要因だった。また、先輩保育士等が後輩たちの学びのために代替職員になって支えてくれたことにも感謝している。

今回、「幼稚園」、「保育所」の現任者が、のびっこクラブでの実践を通じて様々な学びの機会を与えていただいた。組織を超えて現任者が同じ目標に向かって学べたことは、自信とつながりを実感しこれからの松島町にとって大変意義あるものであると確信している。

松島町の巡回心理相談が始まって 16 年が経過した。「自給自足」の支援体制がそれぞれの職種・立場で動き始めた。健診での早期発見から相談、「のびっこクラブ」の療育、それぞれの幼稚園、保育所での巡回相談へとうまく繋がっていくように、これからは習得した知識とスキルを現場で活用し、学びを後輩に伝えていきながら、皆で取り組んでいく支援の連鎖が課題となるだろう。

今後も子どもや親に寄り添いながら、地道に地域で発達障害支援に取り組んでいきたい。

参考資料

平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業実施要綱

（趣旨）

第１ この要綱は、平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業（以下「モデル事業」という。）の実施に関して必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第２ モデル事業は、自閉症、アスペルガー症候群等の広汎性発達障害、学習障害及び注意欠陥多動性障害等の発達障害児者並びにその家族が地域で安心して暮らしていけるよう、発達障害児者の支援ニーズや成長段階に応じた支援手法の開発、分析及び検証等を行い、発達障害児者に対する有効な支援方法の確立を図ることを目的とする。

（実施主体）

第３ モデル事業の実施主体は、宮城県（以下「県」という。）とする。

（事業の内容）

第４ 県は、次に掲げるモデル事業を実施するものとする。

（１）資源の限られた地域における幼児発達支援手法の開発

発達障害やその疑いのある就学前の子どもに対して、発達支援を行い、その効果を検証することで、行動障害・二次的障害の「予防」のための効果的な幼児発達支援手法の開発を行う。

なお、本事業の実施に当たっては、事業に参加する保育所及び幼稚園の運営に支障を来すことのないよう、次のとおり、当該保育所及び幼稚園に代替保育士及び代替幼稚園教諭（以下「代替保育士等」という。）を配置の上、実施するものとする。

イ 代替保育士等は、県が依頼して配置するものとする。

なお、代替保育士等に係る手当支給基準は別に定める。

ロ 代替保育士等の勤務確認については、県が松島町及び松島町教育委員会に依頼して行うものとする。

ハ 子育て支援センターで実施される発達支援に参加する当該保育所及び幼稚園の保育士及び幼稚園教諭が、当日急遽休暇となった場合には、代替保育士等は当該保育所等において勤務することとする。

ニ 代替保育士等の検便等の必要経費については、当事業において支弁する。

（２）幼児健康診査（以下「幼児健診」という。）におけるアセスメントツールの開発

幼児健診にアセスメントツールを導入し、その効果を検証することで、アセスメント手法の開発を行う。

市町村、関係機関等に発達障害児者の支援の尺度となるアセスメントツール導入を促進するための研修を実施する。

（３）家族支援体制整備の開発

ペアレント・メンターの養成に必要な研修等を実施し、家族の支援及び家族同士で支援できる体制の構築に向けた開発を行う。

（委員会の設置等）

第５ 県は、モデル事業を円滑かつ効果的に実施するため、次に掲げる委員会等を置くものとする。

（１）宮城県発達障害児者支援開発事業企画・推進委員会（以下「企画・推進委員会」という。）

（２）発達障害児者支援モデル事業マネージャー（以下「マネージャー」という。）

（３）宮城県発達障害児者支援開発事業アセスメント検討会（以下「アセスメント検討会」という。）

（４）宮城県発達障害児者支援開発事業ペアレント・メンター検討会（以下「ペアレント・メンター検討会」という。）

(企画・推進委員会)

第6 企画・推進委員会は、次に掲げる業務を行うものとし、その組織及び運営については別に定める。

- (1) 県内における発達障害児者の支援ニーズ及び体制整備等に関する実態の把握
- (2) 前号の実態把握を踏まえたモデル事業の実施計画策定
- (3) モデル事業の実施状況等の評価、とりまとめ
- (4) 発達障害児者の成長段階に応じた支援方法の開発
- (5) 第7に規定するマネージャーを通じた県に対する指導及び助言等

(マネージャー)

第7 県は、発達障害児者等に対する支援について、相当の経験及び知識を有する者又はそれと同等と認められる者をマネージャーとして2名専任で配置するものとする。

2 マネージャーは、発達障害児者の支援に関わる病院、保健センター、障害福祉サービス事業所、就労支援機関、学校その他の関係機関及びその職員と密接な連携の下、次に掲げる業務を行うものとする。

- (1) モデル事業の進行管理
- (2) 県と企画・推進委員会との連絡調整
- (3) 地域の実態把握、実施計画の策定、実施結果の取りまとめ及び評価に対する実務的な見地からの提言

(アセスメント検討会)

第8 アセスメント検討会は、県保健福祉部及び関係機関の担当者と構成し、支援手法の効果測定、第4(2)に規定するアセスメント手法の開発等を行うものとする。

なお、アセスメント検討会の開催について必要な事項は別に定める。

(ペアレント・メンター検討会)

第9 ペアレント・メンター検討会は、県保健福祉部及び関係機関の担当者と構成し、第4(3)に規定する家族支援体制整備の開発等を行うものとする。

なお、ペアレント・メンター検討会の開催について必要な事項は別に定める。

(関係機関との連携)

第10 県は、必要に応じて、専門的な見地からの意見・人材等を求めるなど、宮城県発達障害者支援センターと連携してモデル事業を実施するものとする。

2 県は、モデル事業の実施に当たって、宮城県発達障害者支援センター連絡協議会・広域特別支援連携協議会合同会議、宮城県発達障害者体制整備検討会との連絡を密にし、相乗効果が得られるよう配慮するものとする。

(留意事項)

第11 県は、事業の実施に当たっては、事業の趣旨・内容を十分に説明し同意を得るなど、その権利擁護に配慮する。

2 モデル事業に従事する者は、事業により知り得た個人情報等を漏らしてはならない。また、事業終了後及びその職を退いた後も同様とする。

(その他)

第12 この要綱に定めるもののほか、この事業の実施に関して必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この要綱は、平成28年8月25日から施行し、平成28年4月1日から適用する
- 2 この要綱は、平成29年3月31日限り、その効力を失う。

平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業企画・推進委員会開催要領

（趣旨）

第１ 平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業企画・推進委員会（以下「委員会」という。）の開催等については、平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業実施要綱に定めるもののほか、この要領の定めるところによる。

（構成）

第２ 委員会は、別表に掲げる者（以下「委員」という。）及び発達障害児者支援モデル事業マネージャーで構成する。

（運営）

第３ 委員会には委員長及び副委員長を置く。

２ 委員長は、委員の互選により選任する。

３ 副委員長は、委員長の指名により選任する。

４ 委員長は、委員会の進行を行う。

５ 副委員長は委員長を補佐し、委員長が不在の時はその職務を代理する。

６ 委員長は、必要に応じて、委員以外の者に委員会への出席を求めることができる。

（庶務）

第４ 委員会の庶務は、保健福祉部障害福祉課において処理する。

（その他）

第５ この要領に定めるもののほか、委員会の運営について必要な事項は、委員会で協議する。

附 則

１ この要綱は、平成２８年８月２５日から施行する。

２ この要綱は、平成２９年３月３１日限り、その効力を失う。

別表（第３関係）

分野	構成員数	摘要
学識経験者	１人	
障害児者支援施設	５人	
当事者保護者団体	２人	
県保健福祉行政関係者	１人	
町保健福祉教育行政関係者	５人	

平成28年度発達障害児者支援開発事業 企画・推進委員会 構成員名簿

(敬称略)

	所属	職 名	氏 名	備考
1	東北福祉大学総合福祉学部	教授	三浦 剛	委員長
2	社会福祉法人宮城県社会福祉協議会 宮城県発達障害者支援センター	所長	石川 仁	
3	社会福祉法人松島町社会福祉協議会	会長	遠山 勝雄	
4	社会福祉法人矢本愛育会 東まつしま障害児デイサポートこどもの広場	センター長	小野 隆一	
5	特定非営利活動法人 さわおとの森	副理事長	高橋 繁夫	
6	特定非営利活動法人 自閉症ピアリンクセンターここねっと 仙台市自閉症相談センター	センター長	黒澤 哲	
7	宮城県自閉症協会	会長	目黒 久美子	
8	いるかの会	会長	遠藤 由美子	
9	宮城県仙台保健福祉事務所	所長	三浦 正之	
10	松島町町民福祉課	課長	阿部 利夫	副委員長
11	松島町健康長寿課	課長	児玉 藤子	
12	松島町教育委員会教育課	課長	本間 澄江	
13	松島町立松島第一幼稚園	園長	鎌田 敦子	
14	松島町立高城保育所	所長	渡邊 礼子	

■発達障害児者支援モデル事業マネージャー

東北文化学園大学医療福祉学部	教授	藤原 加奈江
松島町児童館	館長	伊藤 かおる

平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業アセスメント検討会開催要領

（趣旨）

第１ 平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業アセスメント検討会（以下「検討会」という。）の開催等については、平成２８年度宮城県発達障害児者支援開発事業実施要綱に定めるもののほか、この要領の定めるところによる。

（構成）

第２ 検討会は、次に掲げる団体等をもって構成する。

- （１） 学識経験者
- （２） 県内市町村
- （３） 保健、福祉の関係部局及び機関の職員
- （４） その他検討会が必要と認める者

（運営）

- 第３ 検討会には座長を置くこととし、構成員の互選により専任する。
- ２ 座長が不在の時は、予め座長が指名した者がその職務を代理する。
 - ３ 検討会は、必要の都度、障害福祉課長が構成員を招集し、座長が会議を統括する。
 - ４ 座長は、必要に応じて、構成員以外の者に検討会への出席を求め、意見を聴くことができる。

（庶務）

第４ 検討会の庶務は、保健福祉部障害福祉課において処理する。

（秘密の保持）

第５ 検討会に出席した者は、委員会において知り得た個人情報等に関することを、他に漏らしてはならない。

（その他）

第６ この要領に定めるもののほか、検討会の運営について必要な事項は、検討会で協議する。

附 則

- １ この開催要領は、平成２８年９月１２日から施行する。
- ２ この開催要領は、平成２９年３月３１日限り、その効力を失う。

平成28年度発達障害児者支援開発事業 アセスメント検討会 構成員名簿

(敬称略)

	所属	職 名	氏 名	備考
1	東北文化学園大学医療福祉学部	教授	藤原 加奈江	座長 発達障害児者支援モデル 事業マネージャー
2	松島町町民福祉課	こども支援班長	田瀬 高広	
3	松島町健康長寿課	主査（保健師）	渡邊 恵美	
4	松島町児童館	館長	伊藤 かおる	発達障害児者支援モデル 事業マネージャー
5	松島町児童館	保育士	尾形 優衣	
6	宮城県子育て支援課	技術主幹	中嶋 亜希子	
7	宮城県中央児童相談所	技術主幹（判定指導班長）	伊藤 紀子	

平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業ペアレント・メンター検討会開催要領

(趣旨)

第1 平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業ペアレント・メンター検討会（以下「検討会」という。）の開催等については、平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業実施要綱に定めるもののほか、この要領の定めるところによる。

(構成)

第2 検討会は、次に掲げる団体等をもって構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 当事者団体、親の会
- (3) 県内市町村
- (4) 福祉の関係部局及び機関の職員
- (5) その他検討会が必要と認める者

(運営)

- 第3 検討会には座長を置くこととし、構成員の互選により選任する。
- 2 座長が不在の時は、予め座長が指名した者がその職務を代理する。
 - 3 検討会は、必要の都度、障害福祉課長が構成員を招集し、座長が会議を統括する。
 - 4 座長は、必要に応じて、構成員以外の者に検討会への出席を求め、意見を聴くことができる。

(庶務)

第4 検討会の庶務は、保健福祉部障害福祉課において処理する。

(秘密の保持)

第5 検討会に出席した者は、委員会において知り得た個人情報等に関することを、他に漏らしてはならない。

(その他)

第6 この要領に定めるもののほか、検討会の運営について必要な事項は、検討会で協議する。

附 則

- 1 この開催要領は、平成29年1月25日から施行する。
- 2 この開催要領は、平成29年3月31日限り、その効力を失う。

平成28年度ペアレント・メンター検討会 構成員名簿

(敬称略)

	所属	職 名	氏 名	備考
1	あおいそらの会	会長	蜂谷 守康	
2	石巻広域 SST の会 アドベンチャークラブ	代表	櫻井 育子	
3	いるかの会	会長	遠藤 由美子	
4	宮城県自閉症協会	会長	目黒 久美子	
5	松島町児童館	館長	伊藤 かおる	座長 発達障害児者支援モデル事業 マネージャー
6	宮城県発達障害者支援センターえくぼ	主査	高橋 伸一郎	
7	石巻祥心会 相談支援事業所ふりーすぺーす”SORA”	管理者	齋藤 康隆	
8	宮城県保健福祉部子育て支援課	技術主査	高橋 学	
9	宮城県保健福祉部東部児童相談所	技術主査	洞口 真紀	

宮城県発達支援者養成研修及びペアレント・メンター養成研修実施要綱

(目的)

第1 この要綱は発達障害の支援に必要な知識及び技能を身につけ、発達障害児者の支援に当たる人材を養成することを目的とした発達障害支援者養成研修及びペアレント・メンター養成研修について必要な事項を定めるものとする。

(実施主体)

第2 この事業の実施主体は、知事とする。

(研修課程)

第3 研修課程は、次の2課程とする。

- (1) 宮城県発達支援者養成研修基礎講座
- (2) 宮城県ペアレント・メンター養成研修基礎講座

(受講対象者)

第4 発達障害支援者養成研修の対象者は、モデル地区の保育所、幼稚園、障害児施設、保健センター職員等とする。

2 ペアレント・メンター養成研修の対象者は、発達障害児者の子育て経験を活かして支援に当たることができる親、または支援機関の職員等とする。ただし、ペアレント・メンター養成研修の修了証書は支援機関の職員には発行しない。

(研修内容)

第5 発達障害支援者養成研修のカリキュラムは5日間の座学及び5日間の実習とし、全課程の8割を超えて出席すれば修了とする。

2 ペアレント・メンター養成研修のカリキュラムは2日間の座学及び実習とし、全課程に出席すれば修了とする。

(修了証書の公布)

第6 知事は、研修修了者に対し、別記様式第1号を交付するものとする。

附 則

- 1 この開催要領は、平成29年2月1日から施行する。
- 2 この開催要領は、平成29年3月31日限り、その効力を失う。

発達障害見守り 松島をモデルに

家族保育士ら対象に教室

発達障害の可能性のある子どもへの接し方を学んでもらおうと、県は松島町をモデル地区に設定し、保護者や保育士、幼稚園教諭らを対象にした支援事業に取り組んでいる。

松島町の児童館を兼ねた子育て支援センターを拠点に町内の保育士や幼稚園教諭、保健師らへの座学や事例研修を実施。9月末からは小学校入学前の子どもと保護者を交え、「のびっこクラブ」と銘打った教室を5回ほど開催する。

県が支援事業 子どもの成長応援

保護者は育児の悩みなどを相談し、保育士らは子どもと直接触れ合いながら適切な関わり方を学ぶ。現職の保育士や幼稚園教諭が教室に参加しやすいよう、勤務先の保育施設に退職した保育士や幼稚園教諭を代役に充てる仕組みも整えた。

取り組みは本年度、厚生労働省のモデル事業に採択された。放課後デイサービスなど関係機関でつくる支援検討会が松島町を推薦し、県が町に協力を求めた。専門機関がなくとも、地域で子どもの成長

を育み、能力を伸ばすことができる環境づくりを目指す。発達障害は自閉症や学習障害、注意欠陥多動性障害などの総称。周囲とうまくコミュニケーションが取れないなどの困難を伴う。文部科学省の調査では、全国の小中学生の6・5%が該当する可能性がある。

早くから本人に合った支援をすれば発達を後押しできるが、適切な支援を受けられないまま成長するケースも少なくない。周囲に否定されるなどして自己肯定感を失う「二次障害」が起ることもある。県障害福祉課の担当者は「障害というと抵抗を感じる保護者もいるかもしれないが、早期に適切な対応を促す子育て支援の一環と考えてほしい。個性や多様性に応じた子育てができるよう、教室を広く学びの場にしたい」と話す。

発達障害児対応 松島モデル事業



達成感味わえる支援必要

発達障害の可能性がある子どもに合った接し方を学んでもらうため、県がモデル地区の松島町で実施している支援事業の実践報告会が17日、町内であった。事業に参加した保育士や幼稚園教諭が、取り組み事例や手応えなどを発表した。

支援事業は町の子育て支援センターを拠点に0～6歳児と保護者、保育士や幼稚園教諭が集う「のびっこクラブ」を5回開催。子どもが達成感を味わいながら集中することや子ども同士の関係構築などを促した。

「のびっこクラブ」の取り組みを発表する保育士ら

地元で報告会 保育士ら事例発表

発表者は「分かりやすい指示や安心できる環境づくりで子どもの意欲は引き出せる」「子どもが笑顔になれば母親もわれわれも笑顔になる。子どもの個性や親の不安に寄り添い、具体的な支援を考えたい」などと説明した。

発達障害は、自閉症や注意欠陥多動性障害などの総称。周囲とうまくコミュニケーションを取れないといった困難を伴う。早くから本人に合った支援をすれば発達の後押しが可能で、年齢に応じた支援体制の構築が課題となっている。

県障害福祉課の担当者は「『発達障害は専門家でなければ対応が難しい』という先入観を超え、保育所や幼稚園の関係者が指導の手応えを感じ、つながりを構築できた。成果を現場で伝えてほしい」と話した。

子どもの発達支援に関する事業のモデル地区に 選定されました

9月30日に、未就学のお子さん、保護者、支援者がともに学ぶ「のびっこクラブ」が松島町児童館で開催されました。この事業は、町の保育士や幼稚園教諭がお子さんの発達を促す接し方を、座学や事例研究を通して研修していくものです。今年、宮城県の事業として、モデル地区に松島町が選定されました。

研修日には元保育士などを研修を受ける職員の代替職員として保育所に配置し、研修しやすい環境を作ります。「のびっこクラブ」では年齢や発達段階によるグループを設定しています。保護者を交えながら、保育士や幼稚園教諭が実際にお子さんに関わる実践研修を、来年2月まで定期的に行っていきます。



みんなで取り組む発達支援

2月17日、文化観光交流館で「平成28年度宮城県発達障害児者支援開発事業報告会 in 松島」が開催され、町内外の児童福祉関係者や教育関係者ら約130人が出席しました。

報告会では、平成28年度県事業の報告と保育所支援グループ・幼稚園支援グループによる実践報告がありました。

その後、発達障害児者支援モデル事業マネージャーである東北文化学園藤原加奈江教授をコーディネーターにお招きし、「地域の中で共に学び、共に成長する発達支援の取組」と題した実践者によるシンポジウムが行われました。実践者からは「保育士と幼稚園教諭の垣根を越えて、松島の子どもについて考えるよい機会となったこと」や「理論として知っていたが、実践してみたことで現場でも活用していきたい」といった話がありました。

本年度、厚生労働省の発達障害児者支援開発事業の県モデル事業として実施してきた「のびっこクラブ事業」は来年度も実施予定であり、支援者の育成と支援体制づくりを継続的に進めていきます。

